

次第に消えゆく姿を追いかけて、あの人の気持ちがわかったとき、私は泣いていた。ずっとこれからも続くんだって涙を拭いたとき、一筋の光が私の前を陰る。そして私の気持ちを理解してくれたあの人がそこにはいた。

ずっと信じてた。ずっと想っていた。

これからは一緒だから――。

涙を流した数だけ人は幸せになれるという。心に何かを響かせるのはどうしてなのだろうと知っているのが私。

彼はそれをいつものように泣いている私を慰める。この前にそんなことをされてしまって、私は照れている。いつもやつてもらったはずなのに。

だから、思わず彼を抱きしめたのは至って普通で当たり前で平凡なこと。どこかで思い出した記憶をどこにでもいいから残しておきたい。いつものようにあの人と彼に言ってあげたいから。

何を隠しても無駄なのだろうと消えゆく存在はそうして消えていった。私は安心して、空を見上げた。

「久しぶりに見た彼の顔」

どこにでもいるような世界を望んだのは私だけではなかったと言ってもいいのかもしれない。ただどいつの日の思い出を手にしたとき、人は何をするのだろうか。その答えがわからず、いつまでも続くことに自分のことを考えるのは最早当たり前と言ってもいいのかもしれない。どちらにしろ、世界が簡単に変わることはないのだから。

私はベッドの上でのんびりと空を眺める。綺麗なうろこ雲に鳥が何匹も飛び交っている景色がどこか必要とされた絵画の先生を産み出したのか頭の中でその情景を描いていた。まるで自分の姿がそこにあるかのように笑顔で笑っている先生は私の瞳を覗き込んできた。

筆が飛ぶ。滑空するそれは私の視線を移しているかのように、私の瞳に飛び込んできたのは一つの世界を元にした、地図があつた。

どこまでも

必要とされるものは

どこにでもあるけど

不必要とされるものは

どこにでもある

何も考えることなく、必要とされるものを探していると、自分の世界のことを考えていた。

いずれにしろ、世界は何ら変わらずに、必要なものを用意してくれていることになぜか感謝している自分がいた。私はのんびりとテレビを見ている。その中でも面白い番組はいつも観ているけれど、ただし、と言ってはなんだが、必ず録画をしないということに私は笑ってしまう。結局は何も変わらないことに気づいたから。そうなのかなと、自分と相談しても何も変わることはない。綺麗な友達空君はいつものように蒼く澄んでいて、綺麗だと私にいつものように笑顔を与えてくれた。部屋の中に何もなければ、私はこれから、どれだけのことをしていくのかを少しだけ考えてみた、それでも世界は回るが、それにしても遅くなっていた。夕食を作らないといけないけど、まだ知月の季節。夕陽はまだ西日になりかかっていない。世界のことをどこにでもあるのだと知ったときから、私は自分のことを考えることを止めてしまいたくない、それがどうしようもなく狭い箱の中で暴れている猫のようだと、私は、知ってしまったのだ。

恐ろしいことだ。私は恐ろしいことを世界の中心で知ってしまった気がした。それ以上のことを止めてほしいとどれだけ頼んでしまったのか。いつものように珈琲を飲んで落ち着いたかった。世界の中で何を選べばいいの？と自分に問いたです。いずれにしろ、世界は変わらない。その事実だけが私を苦しめた。

蒼空を見よう。ふとそう思った。

一人の中で

二人を知ったとき

そこに喜びと 苦しみ

そこに笑顔と 苦い

二つがあつた

散歩に出かけると、スーパーの外に出ていく人を何人も見つける。もうこんな時間なのかと、忘れかけていた自分の世界をまた見つめてしまっているのだろうか。私は苦笑して、蒼空を見つめる。

澄んでいる。綺麗である。華麗である。

ただただ、それだけ。私が見つめているのは一体何なんだろうと、いつものようにポケットに手をつ突っ込んで周りを見渡す。私はあまり友達がいらないが、最近、昔を思い出す。一緒に遊んでいた友達を。空の色がそのことを教えてくれる。世界には何もなくて、自分の存在証明をしないといけないなんて、自分だけでは何もできないのだと、それだけ自分の世界を大切にしている、ということなのだろうか。

並べ立てられた文句を手書きで見つめていると、手帳の大切さがわかった気がした。なんだか、私は小さなことにもこのことを伝えなければならないことに彼の顔を見たくなるのも仕方

ないことなのかもしれない。

とりあえず、スーパ―の前でずっと看板だけ見ているのも変だから、入ることにした。

人の望みは

悔しさが 勝負として

あるのだから

時に 許すのも

それもまた 勝負

何もしないでも手に入るものって何だろうって考えながら買い物をしていただけ、綺麗事って思ってた自分の中でいつもそうやって解決してしまうのはもったいないものなのかもしれない。私は一人が嫌だと叫んでいた小さな頃を少しだけ想って綺麗事を空想のように思っていたのがいつの間にか大切なものになっていた。

どうしてこんなことを考えているのか自分の中で不思議だった。自分だけのことを考えているのにそれでも自分のことを大切にしていたのが今でも笑い声をあげている私の幼き頃に投影してしまうのが今でも笑ってしまうのはどうしてだろう。とても大切なことなんだから、そんなよくわからないことを考えてしまうのがいけないのだと思っても。それでも、それでも。

いつの日か大切にしていた、自分だけの世界を望んでいたのがどうしてもわからなくなっていたのだし、世界に教えたかった、一つの可能性。それは。

「自然。ただただそれだけを描写している世界がこんなにも虚しいの？　って、私、何考えているんだろう」

夕陽に向かっているような階段を歩いていく。金網に食いしばって飛ぼうとしている鳥が少し面白く思えて私は一歩階段を上って、鳥が飛ぶ姿をじつと見つめる。きつとこの雀か雲雀かわからない鳥を私自身に投影しているのかもしれない。私は少しおかしかった。

右手に持っているスーパードで買ってきた食材を私はぎゅつと掴む。重い野菜と肉で今日は美味しい料理を作ろうと改めて思った。

自分にだけあるのだから

それだけを信じてよ

だって

あなたは　いつも

私の心の中にいるのに